

聖書神学専攻・旧約聖書神学関係	
旧約聖書神学特殊研究 a	小友 聡
前期・2単位	<登録条件>
<p><授業の到達目標及びテーマ> 旧約神学、釈義、歴史に関する諸問題から、一つの主題を掲げて深く掘り下げる特殊研究のクラスである。</p>	
<p><授業の概要> 今学期はコヘレトの時間論を主題にし、コヘレトのテキストから時間論について論じ、黙示思想の時間論と比較する。</p>	
<p><履修条件></p>	
<p><授業計画></p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 序論 2. 旧約聖書における時間：ポーマン『ヘブライ人とギリシャ人の思惟』をめぐって 3. ヘブライ語の時間概念 4. コヘレトにおける「時」：3章1-8節 5. コヘレトにおける「時」：3章9-17節 6. コヘレトにおける「時」：9章11-12節 etc. 7. R. Murphy, Ecclesiastes (WBC), 1992. 8. C.L. Seow, Ecclesiastes (AB), 1997. 9. 決定論と非決定論について 10. 黙示における「時」 11. 黙示における「時」：ダニエル書の場合 12. フォン・ラート『イスラエルの知恵』をめぐって 13. ヘンゲル『ユダヤ教とヘレニズム』をめぐって 14. コヘレトとダニエル：西村俊昭氏の論文をめぐって 15. 総合討議 	
<p><準備学習等の指示></p>	
<p><テキスト> Biblia Hebraica Stuttgartensia</p>	
<p><参考書> 参考文献はそのつど指示する。</p>	
<p><学生に対する評価（方法・基準）> 割り当てられた担当内容と毎回の討論への参加度によって評価する。</p>	

聖書神学専攻・旧約聖書神学関係	
旧約聖書神学特殊研究 b	小友 聡
後期・2単位	<登録条件>
<p><授業の到達目標及びテーマ> 旧約神学、釈義、歴史に関する諸問題から、一つの主題を掲げて深く掘り下げる特殊研究のクラスである。</p>	
<p><授業の概要> この学期は雅歌を取り上げ、そのテキストをじっくり読み、雅歌の意味と意義について考察する。</p>	
<p><履修条件></p>	
<p><授業計画></p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 序論 2. 雅歌の緒論的考察 3. 1章の解釈 4. 2章1-7節の解釈 5. 2章8-17節の解釈 6. 3章の解釈 7. 4章1-7節の解釈 8. 4章8-16節の解釈 9. 5章1-8節の解釈 10. 5章9-16節の解釈 11. 6章の解釈 12. 7章の解釈 13. 8章の解釈 14. 雅歌の構造と主題 15. 雅歌とはどういう書なのか 	
<p><準備学習等の指示></p>	
<p><テキスト> Biblia Hebraica Stuttgartensia</p>	
<p><参考書> そのつど指示するが、いくつかの注解書を各自選んで常に参照すること。</p>	
<p><学生に対する評価（方法・基準）> 割り当てられた担当内容と毎回の討論への参加度によって評価する。</p>	

聖書神学専攻・旧約聖書神学関係	
旧約聖書原典特殊研究 a	本間 敏雄
前期・2単位	<登録条件> ヒブル語基礎文法修得者
<p><授業の到達目標及びテーマ> 創世記12、13、14章を釈義し、テキストの神学を探る。</p>	
<p><授業の概要> 構文論とマソラ本文の基礎知識を踏まえ、創世記12～14章のアブラ(ハ)ム物語を釈義する。前期課程「旧約聖書原典釈義IIa」と合同。特殊研究として、マソラとヒブル語本文の諸現象に留意し、その重層構造とテキストの神学を探りたい。</p>	
<p><履修条件></p>	
<p><授業計画></p> <p>第1回：創世記12：1-3 召命と約束 第2回：創世記12：4-6 応答 第3回：創世記12：7-9 土地の約束 第4回：創世記12：10-13 エジプト逃避 第5回：創世記12：14-17 サライ事件 第6回：創世記12：17-20 追放 第7回：創世記13：1-4 出エジプト 第8回：創世記13：5-8 土地争い 第9回：創世記13：9-13 ロトの選択 第10回：創世記13：14-18 約束の更新(1) 第11回：創世記14：1-7 世界大戦 第12回：創世記14：8-12 ソドム 第13回：創世記14：13-16 ロトの救出 第14回：創世記14：17-20 メルキゼデク 第15回：創世記14：21-24 ソドム王とアブラム</p>	
<p><準備学習等の指示></p>	
<p><テキスト> Biblia Hebraica Stuttgartensia (BHS)、レニングラード写本 (Codex Leningradensis) 写真版。 辞書は Gesenius 又は BDB.</p>	
<p><参考書> 「ヒブル語入門」(改訂増補版 左近/本間)、「旧約聖書の本文研究」(E. ヴェルトヴァイン)、「旧約聖書釈義入門」(H.バルト/O.H シュテック)。写本・マソラ資料は必要に応じて配布する。他の釈義的文献は授業で指示する。</p>	
<p><学生に対する評価(方法・基準)> 課題の発表と討議、レポートの総合で評価する。</p>	

聖書神学専攻・旧約聖書神学関係	
旧約聖書原典特殊研究 b	本間 敏雄
後期・2単位	<登録条件> ヒブル語基礎文法修得者
<p><授業の到達目標及びテーマ> 創世記15、16、17章を釈義し、テキストの神学を探る。</p>	
<p><授業の概要> 構文論とマソラ本文の基礎知識を踏まえ、創世記15～17章のアブラハム物語を釈義する。ヒブル語本文の諸現象に留意し、テキストの神学を探りたい。前期課程「旧約聖書原典釈義 II b」と合同。特殊研究として、後期はマソラ本文に見られるユダヤ教的解釈作業に留意し、その釈義的地平を展望したい。</p>	
<履修条件>	
<p><授業計画></p> <p>第1回：創世記15：1-4 約束の更新(2)</p> <p>第2回：創世記15：5-6 信仰と「義認」</p> <p>第3回：創世記15：7-11 契約祭儀</p> <p>第4回：創世記15：12-16 出エジプト預言</p> <p>第5回：創世記15：17-21 契約批准</p> <p>第6回：創世記16：1-4 サライとハガル</p> <p>第7回：創世記16：5-9 ハガルの逃亡</p> <p>第8回：創世記16：10-12 イシュマエル預言</p> <p>第9回：創世記16：13-16 ハガルの告白</p> <p>第10回：創世記17：1-3 約束の更新(3)</p> <p>第11回：創世記17：4-8 アブラムの改名</p> <p>第12回：創世記17：9-14 割礼の契約</p> <p>第13回：創世記17：15-18 サライの改名</p> <p>第14回：創世記17：19-22 イサク誕生予告</p> <p>第15回：創世記17：23-26 割礼の実施</p>	
<p><準備学習等の指示></p> <p>予習大切</p>	
<p><テキスト></p> <p>Biblia Hebraica Stuttgartensia (BHS)、レニングラード写本 (Codex Leningradensis) 写真版。 辞書は Gesenius 又は BDB.</p>	
<p><参考書></p> <p>「ヒブル語入門」(改訂増補版 左近/本間)、「旧約聖書の本文研究」(E. ヴェルトヴァイン)、「旧約聖書釈義入門」(H.バルト/O.H シュテック)。写本写真版・マソラ資料は必要に応じて配布する。他の釈義的文献は授業で指示する。</p>	
<p><学生に対する評価(方法・基準)></p> <p>課題の発表と討議、レポートの総合で評価する。</p>	

聖書神学専攻・旧約聖書神学関係	
聖書語学特殊研究 a	佐藤 泉
前期・2単位	<登録条件> 通年で履修するのが望ましい。
<p><授業の到達目標及びテーマ> 聖書の古代訳の一つであるペシッタ（シリア語訳）を読むことは、聖書の原典との比較によって、聖書解釈に大きな意味を持って来る。この授業ではペシッタを読むことを目標としている</p>	
<p><授業の概要> ペシッタを読むために必要なシリア語の文法を学ぶ。</p>	
<p><履修条件> ヒブル語履修済みであることが望ましい。</p>	
<p><授業計画></p> <p>第1回：序 シリア語を学ぶ意義を話し、子音について（1）ヤコブ派の書体を学ぶ。 第2回：子音について（2） ネストリウス派とエストラングラの書体を学ぶ。 第3回：母音について ヤコブ派とネストリウス派の母音記号を学ぶ。 第4回：代名詞について 人称・指示・疑問・関係代名詞を学ぶ。 第5回：前置詞について 基本的なものをいくつか学ぶ。 第6回：名詞について（1） 基本的な名詞について、ヘブライ語との比較をしつつ、その特徴を学ぶ。 第7回：代名詞語尾について ヘブライ語と同様にシリア語も名詞等に代名詞語尾がつくことを学ぶ。 第8回：名詞について（2） 母音の移動を伴うものを学ぶ。 第9回：名詞について（3） 不規則変化するものを学ぶ。 第10回：規則動詞について（1） Peal 形の変化、特に完了を学ぶ。 第11回：規則動詞について（2） Peal 形の変化、特に未完了・命令・分詞・不定詞を学ぶ。 第12回：規則動詞について（3） Ethpeel 形の変化を学ぶ。 第13回：規則動詞について（4） Pael 形と Ethpael 形の変化を学ぶ。 第14回：規則動詞について（5） Aphel 形と Ettaphal 形の変化を学ぶ。 第15回：規則動詞について（6） 代名詞語尾のついた形の変化を学ぶ。</p>	
<p><準備学習等の指示> 授業中に指示のあった練習問題等について、できる範囲で準備すること。</p>	
<p><テキスト> Theodore H. Robinson, Paradigms and Exercises in Syriac Grammar, 3rd. ed., Oxford University Press, London, 1949.</p>	
<p><参考書> William Jennings, Lexicon to the Syriac New Testament, Oxford at the Clarendon Press, 1926.</p>	
<p><学生に対する評価（方法・基準）> 予習・復習、積極的な授業参加の状況によって成績をつける。</p>	

聖書神学専攻・旧約聖書神学関係	
聖書語学特殊研究 b	佐藤 泉
後期・2単位	<登録条件> 通年で履修するのが望ましい。
<p><授業の到達目標及びテーマ> 聖書の古代訳の一つであるペシッタ（シリア語訳）を読むことは、聖書の原典との比較によって、聖書解釈に大きな意味を持って来る。この授業ではペシッタを読むことを目標としている。</p>	
<p><授業の概要> シリア語の文法の学びを継続する。その後に講読に入るが、まず新約からマタイによる福音書の「山上の説教」、さらに旧約からエレミヤ書をペシッタで読む。（箇所は未定。授業中に指示する。）</p>	
<p><履修条件> ヒブル語履修済みであること並びに聖書語学特殊研究 a（シリア語）履修済みであることが望ましい。</p>	
<p><授業計画></p> <p>第1回：不規則動詞について（1） Pê Nun 動詞の変化を学ぶ。 第2回：不規則動詞について（2） Lamed 喉音動詞の変化を学ぶ。 第3回：不規則動詞について（3） Pê 'alep 動詞の変化を学ぶ。 第4回：不規則動詞について（4） Pê Yöd 動詞の変化を学ぶ。 第5回：不規則動詞について（5） 二根字動詞の変化を学ぶ。 第6回：不規則動詞について（6） 二重'ayin 動詞の変化を学ぶ。 第7回：不規則動詞について（7） Lamed Hê・Lamed Yöd 動詞の変化を学ぶ。 第8回：「山上の説教」の講読（1） Jennings の辞書を引きながら、ペシッタを読むことに慣れる。 第9回：「山上の説教」の講読（2） 原典との比較をしつつ読むことを味わう。 第10回：「山上の説教」の講読（3） シリア語文法、特に不規則変化する名詞を確認しつつ読む。 第11回：「山上の説教」の講読（4） シリア語文法、特に動詞の変化を確認しつつ読む。 第12回：「山上の説教」の講読（5） シリア語が解釈に影響を与えている一例について話す。 第13回：エレミヤの講読（1） ネストリウス派の書体・母音記号で読むことに慣れる。 第14回：エレミヤの講読（2） シリア語文法を全体的に思い出しつつ読む。 第15回：エレミヤの講読（3） 原典や七十人訳と比較しつつ読むことを味わう。</p>	
<p><準備学習等の指示> 授業中に指示のあった練習問題等について、できる範囲で準備すること。</p>	
<p><テキスト> Theodore H. Robinson, Paradigms and Exercises in Syriac Grammar, 3rd. ed., Oxford University Press, London, 1949.</p>	
<p><参考書> William Jennings, Lexicon to the Syriac New Testament, Oxford at the Clarendon Press, 1926.</p>	
<p><学生に対する評価（方法・基準）> 予習・復習、積極的な授業参加の状況によって成績をつける。</p>	

聖書神学専攻・新約聖書神学関係	
新約聖書神学特殊研究 a	焼山 満里子
前期・2単位	<登録条件>
<p><授業の到達目標及びテーマ> 新約聖書、初期キリスト教における神学議論をテキスト、新約聖書、初期教父の著作を通して学ぶ。</p>	
<p><授業の概要> テキストを分担して講読し、そこで行われている議論を批判、検討する。</p>	
<p><履修条件></p>	
<p><授業計画></p> <ol style="list-style-type: none"> 1. オリエンテーション 2. ペイゲルス序論およびペイゲルス第一章「神の国は近づいた」 37-63頁 3. ペイゲルス第一章「神の国は近づいた」 64-89頁 4. ペイゲルス第一章において引用された新約聖書箇所を検討 5. ペイゲルス第二章「ローマ体制に逆らうキリスト教徒たち」 91-113頁 6. ペイゲルス第二章「ローマ体制に逆らうキリスト教徒たち」 114-136頁 7. ペイゲルス第二章で引用されていた初期教父の著作検討 8. ペイゲルス第三章「創世記の主題によるグノーシス的解釈の即興変奏曲」 137-152頁 9. ペイゲルス第三章「創世記の主題によるグノーシス的解釈の即興変奏曲」 153-174頁 10. ペイゲルス第三章で引用されていたグノーシス文献の検討 11. ペイゲルス第四章『『独身者の楽園』回復』 175-210頁 12. ペイゲルス第五章「楽園の政治学」 211-244頁 13. ペイゲルス第五章「楽園の政治学」 245-263頁 14. ローマの信徒への手紙におけるアダムの検討 15. ペイゲルス第六章「自然の本性」 265-310頁 <p>受講者の関心により予定は適宜調整する。</p>	
<p><準備学習等の指示> 各自、テキストを分担し講読を行う。各回発表担当者は議論の紹介をし、受講者と共に批判検討を行う。</p>	
<p><テキスト> ペイゲルス『アダムとエバと蛇』ヨルダン社、1993年。各自準備すること。</p>	
<p><参考書> 適宜紹介する。</p>	
<p><学生に対する評価（方法・基準）>発表の準備、議論への貢献等による授業参加、期末課題。</p>	

聖書神学専攻・新約聖書神学関係	
新約聖書神学特殊研究 b	焼山 満里子
後期・2単位	<登録条件>
<p><授業の到達目標及びテーマ> 使徒パウロの伝道活動とパウロ教会について理解を深める。</p>	
<p><授業の概要> テキストを講読、批判検討しつつ、パウロの伝道活動とパウロ教会について学び、新約聖書パウロ書簡、初期キリスト教について学ぶ。</p>	
<p><履修条件></p>	
<p><授業計画></p> <ol style="list-style-type: none"> 1. オリエンテーション 2. ミークス序論 3. ミークス第一章 「パウロ的キリスト教の都市環境」 33-64頁 4. ミークス第一章 「パウロ的キリスト教の都市環境」 65-112頁 5. ミークス第二章 「パウロ教会の会員達の社会層」 144-168頁 6. ミークス第二章 「パウロ教会の会員達の社会層」 169-190頁 7. ミークス第三章 「教会の形成」 205-246頁 8. ミークス第三章 「教会の形成」 247-280頁 9. ミークスの方法論の検討 10. ミークス第四章 「統治」 301-334頁 11. ミークス第四章 「統治」 335-360頁 12. ミークス第五章 「祭儀」 370-413頁 13. ミークス第六章 「信仰形態と生活形態」 423-450頁 14. ミークス第六章 「信仰形態と生活形態」 451-471頁 15. 総括 <p>受講者の関心により予定は適宜調整する。</p>	
<p><準備学習等の指示> 各自、テキストを分担し講読を行う。各回発表担当者は議論の紹介をし、受講者と共に批判検討を行う。</p>	
<p><テキスト> ウェイン・ミークス『古代都市のキリスト教』加山久夫監訳 ヨルダン社、1989年。現在、絶版なので古本等の入手、図書館所蔵のものを使うことを勧める。</p>	
<p><参考書> 適宜紹介する。</p>	
<p><学生に対する評価（方法・基準）>発表の準備、議論への貢献等による授業参加、期末課題。</p>	

聖書神学専攻・新約聖書神学関係	
新約聖書原典特殊研究 a	永田 竹司
前期・2単位	<登録条件>原則として通年(a, b)で登録すること。但し、学期毎履修学生にも対応する。
<p><授業の到達目標及びテーマ></p> <p>新約聖書を歴史的批判的に釈義する方法論を学ぶことと、それによって得られるテキスト世界の意味と現代における意味展開とをどのように関係づけていくかという解釈学的営みを学ぶこと。</p>	
<p><授業の概要></p> <p>新約聖書文書の中から一つの文書をテキストとし、聖書学の研究成果を参照しながら、テキストを詳細に分析研究することによって、その思想を考察することを第一義的課題とする。現代のキリスト教、また社会一般にとっていかなる意味を持つかも検討する。形式は学生による発表を中心とし、質疑応答および補足的指導を行う。今回は、「ローマ書1章から8章」をテキストとする。</p>	
<p><履修条件></p> <p>新約ギリシャ語初等文法、新約ギリシャ語テキスト読解の基礎知識が必須。</p>	
<p><授業計画></p> <p>第1回：聖書学の研究史から見たローマ書（講義）</p> <p>第2回：ローマ書の初めと終わり（1章と15章）。著者、宛先、執筆事情の考察</p> <p>第3回：ローマ書1:8-17の釈義、中心主題をめぐって。</p> <p>第4回：ローマ書1:18-3:20 神の義の啓示の問題をめぐって I その1 1:18-32 異邦人の罪とはなにか。</p> <p>第5回：ローマ書1:18-3:20 神の義の啓示の問題をめぐって II その2 2:1-3:8 ユダヤ人の罪とはなにか。民族宗教における境界線の問題の考察</p> <p>第6回：ローマ書1:18-3:20 神の義の啓示の問題をめぐって III その3 3:9-20 全人類が同様に罪人であるとの人間観の考察</p> <p>第7回：ローマ書3:21-5:11 恵みとしての義の主題をめぐって I その1 3:21-31 キリストの死と信仰の義の普遍性の考察</p> <p>第8回：ローマ書3:21-5:11 恵みとしての義の主題をめぐって II その2 4:1-25 アブラハムの事例と聖書証明の問題</p> <p>第9回：ローマ書3:21-5:11 恵みとしての義の主題をめぐって III その3 5:1-11 義とされた者の現在と将来の主題をめぐって</p> <p>第10回：ローマ書5:12-21 アダムとキリストのタイポロジーの考察</p> <p>第11回：ローマ書6:1-23 キリスト者の生における義認の意味についての考察</p> <p>第12回：ローマ書7:1-25 ユダヤ教対キリスト教の思想的構図 罪と律法の欺瞞 I その1 7:1-6 律法からの解放をめぐって</p> <p>第13回：ローマ書7:1-25 ユダヤ教対キリスト教の思想的構図 罪と律法の欺瞞 II その2 7:7-25 律法と罪と「わたし」：「わたし」のあり方の問題をめぐって。</p> <p>第14回：ローマ書8:1-39 霊によって生きるとは何か I その1 8:1-17 霊によって生きる対古い肉による生き方の対比をめぐって</p> <p>第15回：ローマ書8:1-39 霊によって生きるとは何か II その2 8:18-39 キリスト者の希望：未来的終末論との関係における考察。</p>	
<p><準備学習等の指示></p> <p>クラスで取り上げる箇所の新約ギリシア語テキストを十分読み、準備してクラスに出席すること。</p>	
<p><テキスト></p> <p>Nestle-Aland (27th ed.), <i>Novum Testamentum Graece</i> 他の版の新約ギリシア語聖書も可。(自分で揃える)</p>	
<p><参考書></p> <p>G・タイセン著、渡辺康磨訳『パウロ神学の心理学的側面』、1990年</p> <p>宮田光雄著、『権威と服従』、2003年</p> <p>E・ケーゼマン著、岩本修一訳『ローマ人への手紙』、1980年</p> <p>James D・G・Dunn, <i>Romans</i> (Word Biblical Commentary), 1988</p> <p>U・ヴィルケンス著 岩本修一・朴憲郁 訳『ローマ人への手紙』上(1984年)、中(1998年)、下巻</p> <p>その他は、クラスで適時紹介する。</p>	
<p><学生に対する評価(方法・基準)></p> <p>授業での発表と期末における研究小論文。クラスのための準備、積極的参加、発表および論文における批判力と想像力、論理および表現の明確さ、情報の確かさ等を重要な評価基準とする。</p>	

聖書神学専攻・新約聖書神学関係	
新約聖書原典特殊研究 b	永田 竹司
後期・2単位	<登録条件>原則として通年(a,b)で登録すること。但し、学期毎履修学生にも対応する。
<p><授業の到達目標及びテーマ></p> <p>新約聖書を歴史的批判的に釈義する方法論を学ぶことと、それによって得られるテキスト世界の意味と現代における意味展開とをどのように関係づけていくかという解釈学的営みを学ぶこと。</p>	
<p><授業の概要></p> <p>新約聖書文書の中から一つの文書をテキストとし、聖書学の研究成果を参照しながら、テキストを詳細に分析研究することによって、その思想を考察することを第一義的課題とする。現代のキリスト教、また社会一般にとっていかなる意味を持つのかも検討する。形式は学生による発表を中心とし、質疑応答および補足的指導を行う。今回は、前期に続き、「ローマ書9章から16章」をテキストとする。</p>	
<p><履修条件></p> <p>新約ギリシャ語初等文法、新約ギリシャ語テキスト読解の基礎知識が必須。</p>	
<p><授業計画></p> <p>第1回：ローマ書 9:1-11:36 人間の不信仰と神の真実をめぐる考察 I その1 9:1-29 神の自由とイスラエルのつまずきの問題</p> <p>第2回：ローマ書 9:1-11:36 人間の不信仰と神の真実をめぐる考察 II その2 9:30-10:21 イスラエルのつまずき、選民意識の問題の考察</p> <p>第3回：ローマ書 9:1-11:36 人間の不信仰と神の真実をめぐる考察 III その3 11:1-36 神の選びの思想の逆説的意味の考察</p> <p>第4回：ローマ書 9:1-11:36 人間の不信仰と神の真実をめぐる考察 IV その4 神の予定と救済論についての諸説の考察</p> <p>第5回：ローマ書 12:1-13:14 キリスト者の生活についての勧告の考察 I その1 12:1-21 信仰共同体の形成と倫理</p> <p>第6回：ローマ書 12:1-13:14 キリスト者の生活についての勧告の考察 II その2 13:1-14 国家と宗教の関係問題</p> <p>第7回：ローマ書 12:1-13:14 キリスト者の生活についての勧告の考察 III その3 信教の自由と国家権力の問題についての歴史的考察</p> <p>第8回：ローマ書 14:1-15:13 宗教的慣習の違いとその克服の問題 I その1 14:1-12 異邦人とユダヤ人との慣習の違いに関する問題</p> <p>第9回：ローマ書 14:1-15:13 宗教的慣習の違いとその克服の問題 II その2 14:13-23 自由と愛の関係：自由を愛のゆえに行使しない自由の概念をめぐる</p> <p>第10回：ローマ書 14:1-15:13 宗教的慣習の違いとその克服の問題 III その3 15:1-13 キリストを模範とする共同体形成の考察</p> <p>第11回：ローマ書 15:14-33 ローマ書の歴史的目的をめぐる考察 I その1 パウロの伝道の拠点主義的特徴</p> <p>第12回：ローマ書 15:14-33 ローマ書の歴史的目的をめぐる考察 II その2 キリスト教歴史における宣教の社会的構造転換の意味についての考察</p> <p>第13回：ローマ書 16:1-27 ローマ教会への個人的挨拶をめぐる I その1 ローマ教会の構成員の特徴と歴史的背景の考察</p> <p>第14回：ローマ書 16:1-27 ローマ教会への個人的挨拶をめぐる II その2 初期キリスト教における女性の位置の問題：「ユニア」をめぐる</p> <p>第15回：ローマ書の現代的意味についての考察（総括）</p>	
<p><準備学習等の指示></p> <p>クラスで取り上げる箇所ギリシア語テキストを十分読み、準備してクラスに出席すること。</p>	
<p><テキスト></p> <p>Nestle-Aland (27th ed.), <i>Novum Testamentum Graece</i> 他の版のギリシア語新約聖書も可。(自分で揃える)</p>	
<p><参考書></p> <p>G・タイセン著、渡辺康鷹訳『パウロ神学の心理学的側面』、1990年 宮田光雄著、『権威と服従』、2003年 E・ケーゼマン著、岩本修一訳『ローマ人への手紙』、1980年 James D・G・Dunn, <i>Romans</i> (Word Biblical Commentary), 1988 U・ヴィルケンス著 岩本修一・朴憲郁 訳『ローマ人への手紙』上(1984年)、中(1998年)、下巻 その他は、クラスで適時紹介する。</p>	
<p><学生に対する評価(方法・基準)></p> <p>授業での発表と期末における研究小論文。クラスのための準備、積極的参加、発表および論文における批判力と想像力、論理および表現の明確さ、情報の確かさ等を重要な評価基準とする。</p>	

聖書神学専攻・新約聖書神学関係	
原始キリスト教特殊研究 a	小河 陽
前期・2単位	<登録条件>学期ごとに履修できるが、通年で受講することが望ましい。
<p><授業の到達目標及びテーマ></p> <p>マルコ福音書の幾つかの段落をテキストとして取り上げ、ギリシア語原典積義の方法を学ぶ。個々のテキストに関して、具体的な積義上の問題を学び、神学内容を吟味するように訓練する。この学習を通してマルコ福音書神学の特徴を掴み、原始キリスト教神学史における位置づけを試みる。さらに、個々のテキストの積義から説教への展開の可能性も模索する。</p>	
<p><授業の概要></p> <p>始めにマルコ福音書の研究史を概観し、積義上の諸問題を把握した上で、幾つかのテキストを範例として積義の方法論について学び、その後に福音書本文の積義に移る。取り上げるテキストを選択的に限定して、その都度、問題点の把握と解釈の方向性を確実にすることに努める。全体として、マルコ福音書神学の全体像を掴むことができるように試みる。参加者各々は分担箇所について発表の義務がある。</p>	
<p><履修条件></p> <p>ギリシア語の基礎知識を必要とするが、絶対条件とはしない。</p>	
<p><授業計画></p> <p>第1回： マルコ福音書の研究史を概観して、現代の研究状況と積義の諸問題を学ぶ。</p> <p>第2回： マルコ 1:21-28（汚れた霊に憑かれた男）で、範例的な積義方法について学ぶ。</p> <p>第3回： マルコ 2:13-17（レビの召命）で、範例的なテキスト分析方法について学ぶ。</p> <p>第4回： マルコ 4：35-41（湖上の嵐を鎮める）で、範例的なテキスト分析の方法について学ぶ。</p> <p>第5回： マタイ 8：5-13 とルカ 7：1-10 の比較から、共観福音書の相違を学ぶ。</p> <p>第6回： マルコ 1:1-8（洗礼者ヨハネ）を中心に積義を行う。</p> <p>第7回： マルコ 1：16-20（弟子召命）を中心に積義を行う。</p> <p>第8回： マルコ 1:40-45（らい患者の癒し）を中心に積義を行う。</p> <p>第9回： マルコ 2:23-28（安息日論争）中心に積義を行う。</p> <p>第10回： マルコ 3:20-35（ベルゼブル論争とイエスの家族）を中心に積義を行う。</p> <p>第11回： マルコ 4:1-20（種まきの譬え）を中心に積義を行う。</p> <p>第12回： マルコ 5:21-43（ヤイロの娘とイエスの服に触れる女）を中心に積義を行う。</p> <p>第13回： マルコ 6:6b-13（弟子の宣教派遣）を中心に積義を行う。</p> <p>第14回： マルコ 6:30-44（5000人の供食）を中心に積義を行う。</p> <p>第15回： マルコ 7:1-23（昔の人の言い伝え）を中心に積義を行う。</p>	
<p><準備学習等の指示></p> <p>クラスで取り上げる原典テキストを熟読し、外国語文献も含んで、代表的な註解書などの文献に目を通しておくこと。</p>	
<p><テキスト></p> <p>Nestle-Aland, Novum Testamentum Graece, 27th edition.</p>	
<p><参考書></p> <p>諸マルコ注解書、その他は授業の中でその都度教員が指示する。</p>	
<p><学生に対する評価（方法・基準）></p> <p>クラスにおける積義への積極的な参加度と学期末提出のレポートにおける習熟度の評価による。</p>	

聖書神学専攻・新約聖書神学関係	
原始キリスト教特殊研究 b	小河 陽
後期・2単位	<登録条件> 学期ごとに履修できるが、通年で受講することが望ましい。
<p><授業の到達目標及びテーマ></p> <p>始めにルカ福音書の研究史を概観し、釈義上の諸問題を把握した上で、個々のテキストに即して、釈義上の諸問題を学び、神学内容を吟味するよう訓練する。釈義から説教への展開の可能性も模索する。</p>	
<p><授業の概要></p> <p>前期に引続き、ルカの福音書から取り上げるテキストを選択的に限定し、具体的な釈義を行うことで、問題点の把握と解釈の方向性を確実にする。最初に簡単に、ルカ福音書の研究史の概観と釈義上の諸問題を学ぶ。参加者各々は分担箇所について発表の義務がある。</p>	
<p><履修条件></p> <p>ギリシア語の基礎知識を必要とするが、絶対条件とはしない。</p>	
<p><授業計画></p> <p>第1回： 前期に於ける釈義の問題と方法の要点を整理・復習する。</p> <p>第2回： ルカ福音書の研究史概観（歴史家、神学者としての著者ルカの評価）</p> <p>第3回： ルカ福音書の研究史概観（ルカの教会とその環境について）</p> <p>第4回： ルカ6：1－6（ナザレの会堂での説教）を中心に釈義を行う。</p> <p>第5回： ルカ5：1－11（漁師を弟子にする）を中心に釈義を行う。</p> <p>第6回： ルカ6：20－49（平地の説教）を中心に釈義を行う。</p> <p>第7回： ルカ7：1－7（百人隊長の僕の癒し）を中心に釈義を行う。</p> <p>第8回： ルカ7：18－35（洗礼者ヨハネとイエス）を中心に釈義を行う。</p> <p>第9回： ルカ7：36－50（罪深い女の赦し）を中心に釈義を行う。</p> <p>第10回： ルカ8：40－56（ヤイロの娘と長血の女の癒し）を中心に釈義を行う。</p> <p>第11回： ルカ9：1－6、10：1－12（弟子たちの宣教派遣）を中心に釈義を行う。</p> <p>第12回： ルカ9：18－27（受難予告）を中心に釈義を行う。</p> <p>第13回： ルカ9：28－43a（山上の変貌）を中心に釈義を行う。</p> <p>第14回： 受難と復活についての釈義的諸問題を取り上げる。</p> <p>第15回： 釈義の方法と可能性について、総括的な反省と展望をする。</p>	
<p><準備学習等の指示></p> <p>クラスで取り上げる原典テキストを熟読し、外国語文献も含んで、代表的な註解書などの文献に目を通しておくこと。</p>	
<p><テキスト></p> <p>Nestle-Aland, Novum Testamentum Graece, 27th edition.</p>	
<p><参考書></p> <p>ルカの註解書、その他は授業の中で、その都度教員が指示する。</p>	
<p><学生に対する評価（方法・基準）></p> <p>クラスにおける釈義への積極的な参加度と学期末に提出のレポートにおける習熟度の評価による。</p>	

聖書神学専攻	
博士論文指導演習 聖書神学 a	各指導教授
前期・0単位	<登録条件>2011 年度以降博士課程後期課程に入学した聖書神学専攻者は、博士論文指導演習聖書神学 b と通年で登録すること。
<授業の到達目標及びテーマ> 学生各自の研究課題に従い、文献の講読や討論などを通じて博士論文を作成する。	
<授業の概要> 各自の研究課題に沿って、諸文献の検討、論文のテーゼや構成・内容などについて指導教授と対話しつつ、博士論文の作成にあたる。	
<履修条件> 2011 年度以降博士課程後期課程に入学した聖書神学専攻者。	
<授業計画> 各指導教授との打ち合わせに基づき、個別に計画する。	
<準備学習等の指示>	
<テキスト>	
<参考書>	
<学生に対する評価（方法・基準）>	

聖書神学専攻	
博士論文指導演習 聖書神学 b	各指導教授
後期・0単位	<登録条件>2011 年度以降博士課程後期課程に入学した聖書神学専攻者は、博士論文指導演習聖書神学 a と通年で登録すること。
<授業の到達目標及びテーマ> 学生各自の研究課題に従い、文献の講読や討論などを通じて博士論文を作成する。	
<授業の概要> 各自の研究課題に沿って、諸文献の検討、論文のテーゼや構成・内容などについて指導教授と対話しつつ、博士論文の作成にあたる。	
<履修条件> 2011 年度以降博士課程後期課程に入学した聖書神学専攻者。	
<授業計画> 各指導教授との打ち合わせに基づき、個別に計画する。	
<準備学習等の指示>	
<テキスト>	
<参考書>	
<学生に対する評価（方法・基準）>	

組織神学専攻・組織神学関係	
教義学特殊研究 a	近藤 勝彦
前期・2単位	<登録条件>博士課程後期課程在学者
<p><授業の到達目標及びテーマ> 組織神学専攻の科目で、教義学特殊研究 b と共に通年で4単位になる。本学の組織神学の伝統を踏まえながら、特に「世界史と救済史の関係」について神学史的経過を踏まえながら、新しい神学的資産を加える基礎とする。</p>	
<p><授業の概要> 「世界史と救済史の関係」は神学全般に関わる問題である。中でも教義学的な啓示、受肉における神性認識に関係し、摂理（統治）論とのかかわりを深くする。神の到来による歴史の認識を明らかにしていきたい。</p>	
<p><履修条件> 参加意識や問題意識をもって、意欲的に参加すること。</p>	
<p><授業計画> 第1回： 神と、歴史としての世界とのかかわり 第2回： この問題におけるカール・レーヴィットの主張 第3回： この問題におけるミルチア・エリアーデの主張 第4回： トマス・トランスの理神論的二元論克服の提案の意味 第5回： 1920年代の「反歴史主義」の神学者たち（カール・バルト） 第6回： 同上（ルドルフ・ブルトマン） 第7回： 同上（パウル・ティリッヒ） 第8回： ヴォルフハルト・パネンベルクにおける「歴史の神」の問題 第9回： 歴史的啓示の認識 第10回： 終末論的中間時と歴史の解釈 第11回： 摂理（統治）論としての歴史の神学 第12回： 同上一伝道史と世界史 第13回： 同上一歴史の曖昧性 第14回： 同上一歴史の試練（迫害・災害・破局）の意味 第15回： 神の国の到来としての終末論</p>	
<p><準備学習等の指示> シラバスの項目中のいずれかを文献に当たって読んでみる。</p>	
<p><テキスト> 授業の中で必要に応じて指示する。</p>	
<p><参考書> カール・レーヴィット『世界史と救済史』、ミルチア・エリアーデ『永遠回帰の神話』、近藤勝彦『啓示と三位一体』、『二十世紀の主要な神学者たち』など</p>	
<p><学生に対する評価（方法・基準）> 積極的に事柄への関心をもって、授業に出席すること。成績評価は授業出席とレポートによって判断する。各自神学者を選んで、そのテキストと取り組みながら、主題について論じること。</p>	

組織神学専攻・組織神学関係	
教義学特殊研究 b	近藤 勝彦
後期・2単位	<登録条件>博士課程後期課程在学者
<p><授業の到達目標及びテーマ> 前期の教義学特殊研究 a を受けて、併せて通年 4 単位となる。キリスト教神学の中心点でもあるイエス・キリストの贖いの御業について学ぶ</p>	
<p><授業の概要> 主要な贖罪論の展開を取り上げ、そこから学びつつ、この問題の新しい展開を探っていきたい。</p>	
<p><履修条件> 問題意識をもって、意欲的に参加して欲しい。</p>	
<p><授業計画> 第 1 回：最近の神学における贖罪論の希薄化、1960 年代以降 第 2 回：最近の神学における贖罪論の希薄化、ユルゲン・モルトマン 第 3 回：マルティン・ルターの贖罪論、贖罪論史の中のルター 第 4 回：マルティン・ルターの贖罪論、日本におけるルターの評価 第 5 回：ジャン・カルヴァンの贖罪論、『キリスト教綱要』において 第 6 回：ジャン・カルヴァンの贖罪論、総合的贖罪論 第 7 回：P.T. フォーサイスの贖罪論、三つよりの糸の意味 第 8 回：P.T. フォーサイスの贖罪論、評価と問題 第 9 回：植村正久の贖罪論の試み、初期の植村において 第 10 回：植村正久の贖罪論の試み、晩年の植村において 第 11 回：カール・バルトの贖罪論、和解論の構造と贖罪論 第 12 回：カール・バルトの贖罪論、その特徴 第 13 回：贖罪論と三位一体 第 14 回：十字架と神の国 第 15 回：レポートの提出</p>	
<p><準備学習等の指示> シラバスの項目中のいずれかを文献に当たって読んでみることを。</p>	
<p><テキスト> 扱うそれぞれの神学者の著作、カルヴァン『キリスト教綱要』、ルター『ガラテヤ大講解』など。</p>	
<p><参考書> アウレン『勝利者キリスト』、近藤勝彦「植村正久の贖罪理解とその今日的意義」(『神学』68 号、2006 年) など</p>	
<p><学生に対する評価(方法・基準)> 授業に勤勉に出席すること。成績評価は授業出席とレポートの内容によって判断する。文献の内容をよく把握することが重要であるが、さらにそれに対する自分自身の評価や判断を示さなければならない。</p>	

組織神学専攻・組織神学関係	
現代神学特殊研究 a	芳賀 力
前期・2単位	<登録条件> 原則として通年での登録が望ましい。
<p><授業の到達目標及びテーマ> 教義学の古典的なテキストを丁寧に読みながら、要旨の正確な把握と相互の討論を通して主題の理解を深め、教義学的な思索力を養う。</p>	
<p><授業の概要> カール・バルトの創造論を取り上げる。創世記1章と2章を徹底した聖書釈義を踏まえながら、さらに神学的に解釈し黙想する方法の実例に触れる。併せて、現代神学における三位一体的創造論の基本的な筋道を探る。</p>	
<p><履修条件> 大学院博士課程後期に在学していること。</p>	
<p><授業計画></p> <p>第1回：現代神学における創造論の問題状況とバルトの創造論の位置づけについて、序論的な話をする。</p> <p>第2回：『創造論 I / 1 創造の業 上』の1-30頁の内容を検討する。</p> <p>第3回：上記テキストの30-58頁の内容を検討する。</p> <p>第4回：テキストの59-87頁の内容を検討する。</p> <p>第5回：テキストの87-117頁の内容を検討する。</p> <p>第6回：テキストの117-146頁の内容を検討する。</p> <p>第7回：テキストの147-178頁の内容を検討する。</p> <p>第8回：テキストの178-203頁の内容を検討する。</p> <p>第9回：テキストの203-232頁の内容を検討する。</p> <p>第10回：テキストの232-260頁の内容を検討する。</p> <p>第11回：テキストの260-289頁の内容を検討する。</p> <p>第12回：テキストの290-321頁の内容を検討する。</p> <p>第13回：テキストの321-349頁の内容を検討する。</p> <p>第14回：テキストの349-377頁の内容を検討する。</p> <p>第15回：これまでの議論を振り返り、総括する。</p>	
<p><準備学習等の指示> 自分の担当以外の場合も、積極的にテキストを直接よく読むこと。</p>	
<p><テキスト> カール・バルト『創造論 I / 1 創造の業 上』（吉永正義訳、新教出版社、一九八四年） 学生各自で購入する。</p>	
<p><参考書> 拙論「創造と三位一体」『神学』73号</p>	
<p><学生に対する評価（方法・基準）> 出席を重視する。授業への積極的な参与の姿勢を評価する。総括として各自レポートを作成する。</p>	

組織神学専攻・組織神学関係	
現代神学特殊研究 b	芳賀 力
後期・2単位	<登録条件> 原則として通年での登録が望ましい。
<p><授業の到達目標及びテーマ> 教義学の古典的なテキストを丁寧に読みながら、要旨の正確な把握と相互の討論を通して主題の理解を深め、教義学的な思索力を養う。</p>	
<p><授業の概要> カール・バルトの創造論を取り上げる。創世記1章と2章を徹底した聖書釈義を踏まえながら、さらに神学的に解釈し黙想する方法の実例に触れる。併せて、現代神学における三位一体的創造論の基本的な筋道を探る。</p>	
<p><履修条件> 大学院博士課程後期に在学していること。</p>	
<p><授業計画></p> <p>第1回：『創造論 I/1 創造の業 上』の 377-406 頁の内容を検討する。</p> <p>第2回：上記テキストの 407-437 頁の内容を検討する。</p> <p>第3回：テキストの 437-466 頁の内容を検討する。</p> <p>第4回：テキストの 466-495 頁の内容を検討する。</p> <p>第5回：テキストの 495-522 頁の内容を検討する。</p> <p>第6回：テキストの 522-551 頁の内容を検討する。</p> <p>第7回：テキストの 551-580 頁の内容を検討する。</p> <p>第8回：テキストの 580-607 頁の内容を検討する。</p> <p>第9回：『創造論 I/2 創造の業 下』の 3-31 頁の内容を検討する。</p> <p>第10回：上記テキストの 32-67 頁の内容を検討する。</p> <p>第11回：テキストの 67-97 頁の内容を検討する。</p> <p>第12回：テキストの 97-125 頁の内容を検討する。</p> <p>第13回：テキストの 126-155 頁の内容を検討する。</p> <p>第14回：テキストの 155-172 頁の内容を検討する。</p> <p>第15回：これまでの議論を振り返り、総括する。</p>	
<p><準備学習等の指示> 自分の担当以外の場合も、積極的にテキストを直接よく読むこと。</p>	
<p><テキスト> カール・バルト『創造論 I/2 創造の業 下』（吉永正義訳、新教出版社、一九八五年） 学生各自で購入する。</p>	
<p><参考書> 拙論「創造と三位一体」『神学』73号</p>	
<p><学生に対する評価（方法・基準）> 出席を重視する。授業への積極的な参与の姿勢を評価する。総括として各自レポートを作成する。</p>	

組織神学専攻・組織神学関係	
現代哲学特殊研究 a	神代 真砂実
前期・2単位	<登録条件>現代哲学特殊研究 b との通年の履修（登録が望ましい）
<授業の到達目標及びテーマ> 後期課程レベルの組織神学的思考力の育成	
<授業の概要> カール・バルトの『教会教義学』の演習形式による精読。今年度は創造論中の人間論。	
<履修条件> (特になし)	
<授業計画> 第1回 オリエンテーション、およびバルトの思想の概要の紹介 第2回 教義学の問題としての人間①宇宙中での人間(その1):テキスト3~19頁 第3回 同(その2):テキスト19~35頁 第4回 同②神学的認識の対象としての人間(その1):テキスト36~51頁 第5回 同(その2):テキスト51~61頁 第6回 同(その3):テキスト62~77頁 第7回 同(その4):テキスト77~96頁 第8回 同(その5):テキスト96~114頁 第9回 教義学の問題としての人間(第43節)のまとめ 第10回 神に造られたものとしての人間①イエス、神のために生きる人間(その1): テキスト115~126頁 第11回 同(その2):テキスト126~150頁 第12回 同②人間的なものの現象(その1):テキスト151~167頁 第13回 同(その2):テキスト167~187頁 第14回 同(その3):テキスト187~200頁 第15回 同(その4):テキスト200~224頁	
<準備学習等の指示> 必ず事前にテキストを読み、質問やコメントを用意してくること。	
<テキスト> カール・バルト、『教会教義学・創造論Ⅱ/1』(菅田吉・吉永正義訳、新教出版社〔オンデマンド〕)。	
<参考書> 授業の中で、必要に応じて紹介する。	
<学生に対する評価(方法・基準)> 発表およびレポート(8,000字程度)による。レポートの作成にあたっては、担当教員の指導を受けること。	

組織神学専攻・組織神学関係	
現代哲学特殊研究 b	神代 真砂実
後期・2単位	<登録条件>現代哲学特殊研究 a との通年の履修（登録が望ましい）
<授業の到達目標及びテーマ> 後期課程レベルの組織神学的思考力の育成	
<授業の概要> カール・バルトの『教会教義学』の演習形式による精読。今年度は創造論中の人間論。	
<履修条件> (特になし)	
<授業計画> 第1回 オリエンテーション 第2回 神に造られたものとしての人間②人間的なものの現象（その5）： テキスト 224～251 頁 第3回 同（その6）：テキスト 251～272 頁 第4回 同③実在の人間（その1）：テキスト 273～294 頁 第5回 同（その2）：テキスト 294～304 頁 第6回 同（その3）：テキスト 304～314 頁 第7回 同（その4）：テキスト 314～324 頁 第8回 同（その5）：テキスト 324～338 頁 第9回 同（その6）：テキスト 339～358 頁 第10回 同（その7）：テキスト 358～369 頁 第11回 同（その8）：テキスト 369～384 頁 第12回 同（その9）：テキスト 384～395 頁 第13回 同（その10）：テキスト 395～407 頁 第14回 同（その11）：テキスト 407～415 頁 第15回 神に造られたものとしての人間（第44節）のまとめ	
<準備学習等の指示> 必ず事前にテキストを読み、質問やコメントを用意してくること。	
<テキスト> カール・バルト、『教会教義学・創造論Ⅱ／1』（菅岡吉・吉永正義訳、新教出版社〔オンデマンド〕）。	
<参考書> 授業の中で、必要に応じて紹介する。	
<学生に対する評価（方法・基準）> 発表およびレポート（8,000字程度）による。レポートの作成にあたっては、担当教員の指導を受けること。	

組織神学専攻・歴史神学関係	
神学史特殊研究 a	棚村 重行
前期・2単位	<登録条件> 通年の履修が望ましい。
<p><授業の到達目標及びテーマ> 「キリスト教霊的生活史」。「宗教としてのキリスト教」を構成する宗教経験、教理神学、実践、共同体などの諸側面を総合して「霊的生活」と呼び、教会史におけるその発展を歴史的に考察する。</p>	
<p><授業の概要> 前期では、聖書成立時代から中世末期までの霊的神学者の a)「三一神の像、似像」としての人間の創造、墮罪、回復の救済史観、b.) 礼拝と祈り（と神学の学び）に焦点をあて講義し、配布テキストを読む。</p>	
<p><履修条件> 霊的生活思想形成における聖書釈義の役割も重視するので、組織専攻者（組織、歴史、実践）のみならず、聖書神学専攻者の参加も歓迎する。</p>	
<p><授業計画></p> <p>第1回：参加者の目標と関心の共有。コースの紹介と導入講義「霊的生活と霊性とは何か？」</p> <p>第2回：導入討論—J.マッコリーの礼拝と祈り論の内容発表と討論</p> <p>第3回：講義（一）：聖書正典における「神の像、似像」としての人間と救済史観（新共同訳聖書）</p> <p>第4回：講義（二）：聖書正典における「礼拝」と「祈り」観（新共同訳聖書）</p> <p>第5回：史料分析（一）：古代東方教会：オリゲネスの神の像と救済史観、礼拝と祈り</p> <p>第6回：史料分析（二）：古代東方教会：アタナシオスの神の像と救済史観、礼拝と祈り</p> <p>第7回：史料分析（三）：古代西方教会：アウグスティヌス：神の像と救済史観、礼拝と祈り観</p> <p>第8回：史料分析（四）：古代末期～初期中世教会：ヌルシアのベネディクトゥス：修道制の理念</p> <p>第9回：史料分析（五）：盛期中世教会：カンタベリーのアンセルムス：礼拝と祈り、神の像と救済史観</p> <p>第10回：史料分析（六）：盛期中世教会：クレルヴォーのベルナルドゥス：神の像と救済史観、礼拝と祈り</p> <p>第11回：史料分析（七）：盛期中世教会：アッシジのフランチェスコ：会則と救済観、礼拝と祈り</p> <p>第12回：史料分析（八）：盛期中世教会：ボナヴェントゥーラ：神の像と救済史観、礼拝と祈り</p> <p>第13回：史料分析（九）：盛期中世教会：トマス・アキナス：神の像と救済史観、礼拝と祈り</p> <p>第14回：史料分析（十）：後期中世教会：ヨハネス・タウラー：神の像と救済史観、礼拝と祈り</p> <p>第15回：前期のまとめと総合討論。</p>	
<p><準備学習等の指示> 授業のなかで指示する。原則として、予習より復習を重視せよ。</p>	
<p><テキスト> すべての史料は、授業ごとにコピーテキストの形で配布する。（聖書は除く。持参せよ）。</p>	
<p><参考書> J. マッコリー『礼拝と祈りの本質——新たな霊性の探究』（ヨルダン社）。</p>	
<p><学生に対する評価（方法・基準）></p> <p>1. 平生の授業と討論に積極的に参加する。また学期末には、以下の要件をみたす研究レポートを作成し提出する。分量は400字詰め原稿用紙で30～35枚以内。</p> <p>2. レポートの内容は次の通り。a) 興味を持つ二人の人物ないし運動を選び、彼らの二次史料を読み、時代背景を調べよ。b) また彼らの第一次史料を精読し、比較して分析し、自分なりの解釈と評価を与えたレポートとせよ。</p>	

組織神学専攻・歴史神学関係	
神学史特殊研究 b	棚村 重行
後期・2単位	<登録条件> 通年の履修が望ましい。
<p><授業の到達目標及びテーマ> 「キリスト教霊的生活史」。「宗教としてのキリスト教」を構成する宗教経験、教理神学、実践、共同体などの諸側面を総合して「霊的生活」と呼び、教会史におけるその発展を歴史的に考察する。</p>	
<p><授業の概要> 後期では、宗教改革時代から現代までの霊的神学者の a) 「三一神の像、似像」としての人間の創造、墮罪、回復の救済史観、b.) 「礼拝」と「祈り」(神学の学び) に焦点をあて講義し、配布テキストを読む。</p>	
<p><履修条件> 前期に同じ。</p>	
<p><授業計画></p> <p>第1回：コースの紹介。参加者の目標や関心を共有する話し合い。</p> <p>第2回：導入討論-P.T.フォーサイス『祈りの精神』の内容紹介と討論</p> <p>第3回：史料分析(一)：十六世紀ドイツ宗教改革(1)：M. ルターの神の像と救済史観</p> <p>第4回：史料分析(二)：十六世紀ドイツ宗教改革(2)：M. ルターの神の礼拝と祈り観</p> <p>第5回：史料分析(三)：十六世紀スイス宗教改革(1)：J. カルヴァンの神の像と救済史観</p> <p>第6回：史料分析(四)：十六世紀スイス宗教改革(2)：J. カルヴァンの礼拝と祈り観</p> <p>第7回：史料分析(五)：十六世紀対抗宗教改革：トレント公会議の救済観とI. ロヨラの『霊操』の祈り観</p> <p>第8回：史料分析(六)：十七世紀ドイツ敬虔主義(1)：J. アルントの神の像と救済史観、礼拝と祈り</p> <p>第9回：史料分析(七)：十八世紀ドイツ敬虔主義(2)：P. シュペーナーとA. フランケの救済観、祈り</p> <p>第10回：史料分析(八)：十八世紀英国の敬虔主義：J. ウェスレーの神の像と救済史観、礼拝と祈り</p> <p>第11回：史料分析(九)：十八～十九世紀米国の大覚醒運動：J. エドワーズとC. フィニーの救済観、祈り</p> <p>第12回：史料分析(十)：十九世紀日本の霊的神学者：植村正久と逢坂元吉郎の救済観、礼拝と祈り</p> <p>第13回：史料分析(十一)：二十世紀スイス神学：K. パルトの神の像と救済史観、祈りと神学</p> <p>第14回：史料分析(十二)：二十世紀スイス神学：E. ブルンナーの神の像と救済史観、祈りと礼拝</p> <p>第15回：史料分析(十三)：現代のドイツ神学：C. シュヴェーベルの神の像と救済史観、祈り観、総合討論。</p>	
<p><準備学習等の指示> 授業の中で指示する。原則として、予習より復習を重視せよ。</p>	
<p><テキスト> すべての史料は、授業ごとにコピーテキストの形で配布する。</p>	
<p><参考書> P.T.フォーサイス『祈りの精神』、ヨルダン社、1978)。J. マッコリー『礼拝と祈りの本質－新たな霊性の探求』(ヨルダン社)。</p>	
<p><学生に対する評価(方法・基準)></p> <p>1. 平生の授業と討論に積極的に参加する。また学期末には、以下の要件をみたす研究レポートを作成し提出する。分量は400字詰め原稿用紙で30～35枚以内。</p> <p>2. レポートの内容は次の通り。a) 興味を持つ二人の人物ないし運動を選び、彼らの二次史料を読み、時代背景を調べよ。b) また彼らの第一次史料を精読し、比較して分析し、自分なりの解釈と評価を与えたレポートとせよ。</p>	

組織神学専攻・歴史神学関係	
宗教改革史特殊研究 a	関川 泰寛
前期・2単位	<登録条件>特になし
<p><授業の到達目標及びテーマ></p> <p>キリスト教教理史の主題を定めて、一次史料に基づいて講義する。一次史料を十分理解して、各時代のキリスト教教理の特色を把握することを目標とする。</p>	
<p><授業の概要></p> <p>宗教改革者ジャン・カルヴァンの生涯と神学について学ぶ。特に『キリスト教綱要』Ⅰ～Ⅱの神論とキリスト論、聖霊論を読んで、カルヴァン神学の特色をつかむ。</p>	
<p><履修条件></p> <p>特になし</p>	
<p><授業計画></p> <p>第1回：宗教改革の時代概観：ルターからツヴィングリまで</p> <p>第2回：宗教改革運動の諸相―再洗礼派や熱狂主義</p> <p>第3回：カルヴァンの生涯（1）生誕から『キリスト教綱要』（初版）出版まで</p> <p>第4回：カルヴァンの生涯（2）第一次ジュネーヴ滞在からストラスブルク時代</p> <p>第5回：カルヴァンの生涯（3）ジュネーヴでの活動再開と改革運動の深化</p> <p>第6回：カルヴァンの著作解題</p> <p>第7回：カルヴァン神学の研究史概観</p> <p>第8回：カルヴァン 『キリスト教綱要』を読む（1）神論Ⅰ 神認識</p> <p>第9回：カルヴァン 『キリスト教綱要』を読む（2）神論Ⅱ 聖書と神認識</p> <p>第10回：カルヴァン 『キリスト教綱要』を読む（3）キリスト論Ⅰ 律法と福音、キリストの三職</p> <p>第11回：カルヴァン 『キリスト教綱要』を読む（4）キリスト論Ⅱ 贖罪</p> <p>第12回：カルヴァン 『キリスト教綱要』を読む（5）聖霊論Ⅰ 信仰義認</p> <p>第13回：カルヴァン 『キリスト教綱要』を読む（6）聖霊論Ⅱ</p> <p>第14回：カルヴァン 『キリスト教綱要』を読む（7）聖霊論Ⅲ</p> <p>第15回：全体に関わる質疑応答とディスカッション</p>	
<p><準備学習等の指示></p>	
<p><テキスト></p> <p>カルヴァン『キリスト教綱要』1・2篇（渡辺信夫訳、改訳版、新教出版社）</p>	
<p><参考書></p> <p>ニーゼル『カルヴァンの神学』他。教室で指示する。</p>	
<p><学生に対する評価（方法・基準）></p> <p>積極的授業態度と演習の発表の内容、小論文を総合して評価する。</p>	

組織神学専攻・歴史神学関係	
宗教改革史特殊研究 b	関川 泰寛
後期・2単位	<登録条件>特になし
<p><授業の到達目標及びテーマ></p> <p>キリスト教教理史の主題を定めて、一次史料に基づいて講義する。一次史料を十分理解して、各時代のキリスト教教理の特色を把握することを目標とする。</p>	
<p><授業の概要></p> <p>宗教改革者ジャン・カルヴァンの生涯と神学について学ぶ。特に『キリスト教綱要』Ⅲ～Ⅳの教会論に関わるカルヴァン神学の特色をつかむ。</p>	
<p><履修条件></p> <p>特になし</p>	
<p><授業計画></p> <p>第1回：カルヴァンと礼拝</p> <p>第2回：ジュネーヴの教会の実像・カルヴァンにおける教会と国家</p> <p>第3回：ローマ・カトリック教会との対立</p> <p>第4回：再洗礼派と熱狂主義者との対立</p> <p>第5回：カルヴァン 『キリスト教綱要』を読む（1）悔い改めについて</p> <p>第6回：カルヴァン 『キリスト教綱要』を読む（2）信仰義認</p> <p>第7回：カルヴァン 『キリスト教綱要』を読む（3）福音と律法</p> <p>第8回：カルヴァン 『キリスト教綱要』を読む（4）キリスト教的な自由</p> <p>第9回：カルヴァン 『キリスト教綱要』を読む（5）祈りと礼拝</p> <p>第10回：カルヴァン 『キリスト教綱要』を読む（6）聖書</p> <p>第11回：カルヴァン 『キリスト教綱要』を読む（7）選び</p> <p>第12回：カルヴァン 『キリスト教綱要』を読む（8）真の教会と偽りの教会</p> <p>第13回：カルヴァン 『キリスト教綱要』を読む（9）戒規</p> <p>第14回：カルヴァン 『キリスト教綱要』を読む（10）洗礼</p> <p>第15回：カルヴァン 『キリスト教綱要』を読む（11）聖餐</p>	
<p><準備学習等の指示></p>	
<p><テキスト></p> <p>カルヴァン『キリスト教綱要』3・4篇（渡辺信夫訳、改訳版、新教出版社）</p>	
<p><参考書></p> <p>ニーゼル『カルヴァンの神学』他。教室で指示する。</p>	
<p><学生に対する評価（方法・基準）></p> <p>積極的授業態度と演習の発表の内容、小論文を総合して評価する。</p>	

組織神学専攻	
博士論文指導演習 組織神学 a	各指導教授
前期・0単位	<登録条件>2011 年度以降博士課程後期課程に入学した組織神学専攻者は、博士論文指導演習組織神学 b と通年で登録すること。
<p><授業の到達目標及びテーマ> 学生各自の研究課題に従い、文献の講読や討論などを通じて博士論文を作成する。</p>	
<p><授業の概要> 各自の研究課題に沿って、諸文献の検討、論文のテーゼや構成・内容などについて指導教授と対話しつつ、博士論文の作成にあたる。</p>	
<p><履修条件> 2011 年度以降博士課程後期課程に入学した組織神学専攻者。</p>	
<p><授業計画> 各指導教授との打ち合わせに基づき、個別に計画する。</p>	
<p><準備学習等の指示></p>	
<p><テキスト></p>	
<p><参考書></p>	
<p><学生に対する評価（方法・基準）></p>	

組織神学専攻	
博士論文指導演習 組織神学 b	各指導教授
後期・0単位	<登録条件>2011 年度以降博士課程後期課程に入学した組織神学専攻者は、博士論文指導演習組織神学 a と通年で登録すること。
<p><授業の到達目標及びテーマ> 学生各自の研究課題に従い、文献の講読や討論などを通じて博士論文を作成する。</p>	
<p><授業の概要> 各自の研究課題に沿って、諸文献の検討、論文のテーゼや構成・内容などについて指導教授と対話しつつ、博士論文の作成にあたる。</p>	
<p><履修条件> 2011 年度以降博士課程後期課程に入学した組織神学専攻者。</p>	
<p><授業計画> 各指導教授との打ち合わせに基づき、個別に計画する。</p>	
<p><準備学習等の指示></p>	
<p><テキスト></p>	
<p><参考書></p>	
<p><学生に対する評価（方法・基準）></p>	